

授業評価 2012 によせて

学生による授業評価アンケートを工学部全学科で開始したのは2002年度です。まる10年が経過しました。授業評価アンケートは教える側だけでは気がつきにくいことも明らかになるなど、教員にとっての授業改善に役立っています。その成果をまとめたものが毎年度公開されるようになり、今年度も「授業評価 2012」として提示されることになりました。10年を超えて長期的に継続していることは、今後の大きな財産にもなり、大変意義深いことだと思っています。

10年の間、授業評価アンケートは、さまざまに見直されてきています。設問項目は適切か、不要な負担になっていないかなど、良い面を認識しながらも、改善すべきところは修正されてきています。それは今後も続いていくでしょう。

学生諸君の建設的な意見が教員側にフィードバックされている様子は、「授業評価 2012」及び過去の冊子から読み取ることができます。授業の変遷を見ることができるといことは、学生諸君にとっても大変有益です。工学部では、将来の基礎となる科目もあれば、応用を紹介する科目あります。同じ教員であっても、科目に合わせて授業のスタイルは変わります。無味乾燥に思われる授業でも、学生諸君の将来を考えて、試行錯誤を繰り返しながら改善しようと努めている例は少なくありません。ぜひ、そのような思いを「授業評価 2012」から感じとって頂きたいと思います。そして、自分自身の履修計画に活かしていただきたいと思います。

教員にとっても「授業評価 2012」は有用です。例えば、全体に目を通してみること、自分自身だけでは気がつかなかった方策が見つかるかもしれません。当該の科目に限定した縦のつながりだけでなく、科目間の枠を超えた横の連携を取ることで、「継続的な授業改善」が思った以上に進展するかもしれません。そのような観点からも「授業評価 2012」が活かされることを願っています。

最後に、アンケートに協力頂いた学生諸君、執筆頂いた教員各位、最終的に報告書を取りまとめて頂いた教育委員ならびに学務グループの皆さんに感謝いたします。

2013年3月

工学部副学部長（教育担当）

伊藤 智義

教員一人ひとりの教育に対する姿勢を知る機会としての授業評価

この「工学部授業評価」が工学部 HP の在学生向けタグのページに置かれていることを鑑みると、この授業評価に対する教員コメント群の意味が見えてきます。ここには、毎年継続的に実施されている授業評価アンケートの結果を受けた教員一人ひとりの真摯な取り組みとその結果、そしてその授業方法に対する見直しと次への展望が記載されています。アンケート項目それぞれの集計による総合的な授業評価に対する自省、確認、次への試行・挑戦を読み取ることが出来るだけでなく、アンケート用紙の裏面に記載された学生一人ひとりからの手書きコメントに対する考察・検討もなされています。つまり、この「工学部授業評価」は単なる授業評価に対する教員コメント集の域を超え、実は学生一人ひとりと教員一人ひとりとの双方向的な意見・考え・希望・教育における夢のやりとりの場を提供していることがわかれると思います。

私自身、常に“これでいいのか？”，“伝えるべきことが伝えられているのか？”と自問自答しながら毎年の15週の、そしてその1週ずつの講義・演習を進めています。そしてその1週の重みを痛切に感じています。そうした中で生まれてくる一喜一憂にも似た教員の本音を垣間見ることが出来るのがこの授業評価に対する教員のコメントなのかもしれません。ぜひとも、ここに記されている事柄を目にし、考え、千葉大工学部で開講されている授業をさらに意味のあるものとすることを目標とした忌憚なき意見を身近な教員に紳士な態度でぶつけてみてください。そしてそれと同時に、身近にいる教員集団の高い能力と高次元とも言える多様性と可能性に気づき、より積極的に関わりをもつきっかけを見つけ出してください。たぶん、読み始めると教員それぞれの授業に取り組む姿勢への驚きと可能性を感じ取ることもできると思います。

授業内容もしくは授業方法は固定化されたものではないと思います。いかに歴史的に体系化された内容の授業科目であっても、それを受け止める学生の状況を踏まえた上で臨機応変にその授業形態を変えていく必要があります、そして今そのことが大きな意味を持ちつつあることを実感しています。それだけにこの授業評価を媒介とした発展的な学生と教員との意見交換はさらに大事なものとなっていくと確信しています。

2013 年 3 月

工学部教育委員会

委員長 久保 光徳